町長ひとりごと ㊵

斉藤譲

四月も半ばともなると、いままで野山を彩っていた花々もすでに盛りを過ぎ、草木はいま新緑への装いをはじめている。

こんな折、朝の犬の散歩の途中で山の北の斜面に、ひっそりと咲くすみれの小さな群生が目に入った。近よってみると、可憐な淡い紫の花が雑草の中で、風にやさしく揺れていた。自分の存在を主張することもなく、誰に媚ることもないこの小さな花を見ていると、その奥床しさが逆に私の心に何かを鋭く訴えかけてくるような気がした。

いま大阪では、花の万博が開かれているが、生活の豊さに伴なってどこの家庭や職場でも、人間の手によって改良されたり、温室で育てられた花が、いっぱいに溢れている。これらの花は、それなりの美しさや華麗さはあるが、人知れず野辺に咲く花と比べれば、どこか媚びを売っているような気がしてならない。

一見してひ弱な感じのするすみれではあるが、風雪に耐えて日蔭に咲く小さな花びらには、人の手が加えられた花とは一味ちがう凛とした気高さと美しさがある。

▼一味ちがうといえば、光中学校の英語講師ジョナサン先生も、日本人とは一味ちがった個性と行動・信念をもって新鮮な教育を展開し、生徒に大きな反響を与えている。彼は、アメリカのテキサス州の出身で、現在二十二歳の青年である。日本に来たのははじめてで、来た当初はほとんど日本語を知らなかった。それが今では、日常会話は十分に通用するほどに上達している。この間わずか九ヵ月である。私は「あなたは頭がいいね。」と誉めたところ、間髪をおかずに「オフコース（勿論）」という答が返ってきた。アメリカ人ならではの明るさとユーモアである。しかし、その蔭では彼は常に腰に小さなバッグをさげ、その中に和英辞典を入れていて、わからない言葉があるとすぐにこれを開き、また愛用の自転車でどこにでも出かけ、誰にでも気安く話しかけていく努力を積み重ねているのである。この行動力と探究心の旺盛さには、唯舌をまくばかりである。授業では、いつも生徒のひとりひとりに必ず声をかけ、ともすれば型にはまりがちな日本の授業とは違い、自分が主役になったり脇役となったりして子供達の心をひきつけ楽しい雰囲気をつくり出しているという。生の英語を聞き、しかも外国人の先生から誉められることによって、生徒達の英語への興味は、大きくふくらんでいるようである。これは事実、生徒達が異口同音に語るところである。更に特筆すべきことは、彼は授業の中で地域の環境問題を取りあげ、特に熱帯雨林の大切さを熱っぽく説き、また自らもこれを守る立場から、ふだん絶対に割り箸を使用しない。どこへ行くのにも辞典と一緒に箸を持ち歩き、食堂などでも自分のものを使用しているそうである。

一味ちがう

「息子が学校から帰ってくるなり、僕は今から割り箸は、絶対に使わないようにする」と言われて驚ろいたと私に語った。味のあるジョナサン先生の教育振りである。

▼更に、一味ちがうといえば、こんなこともある。平成元年度の行政委員（区長）の中に鈴木真清さん（母子）という方がいた。鈴木さんは、とても実直な方であり、誰からも好かれている好人物である。お酒もお好きなようで、楽しい酒を飲まれる。この鈴木さんが、はじめての会議におみえになったときは、とても緊張をしておられた。三月の末、一年の任期が終えたお別れの宴席で、私は鈴木さんに、「今日のお酒の味はいかがですか」と声をかけた。これもジョナサン先生ではないが、にっこりと笑って「一味ちがいますね」といいながら、うまそうに一気に飲み乾した。責任を果たし、解放された安堵感が、鈴木さんの小柄な身体中に漂っていた。

▼斯く言う私も、いままさに四年の任期を終えようとしている。果たして、この間私は自分の責任を果たし得たかどうか、自問すればするほど反省が先に立って、素直に「今の気分は一味ちがいます」とは、とても言えない。唯、四年間全力投球をしてきたという思いだけは、はっきりと胸の中にある。責任を果たし得たか否かは、町民の皆様のご判断を待つ以外にない。いま私が断言できるのは、十年後には到来する二十一世紀に向かって、物真似ではなく、創意と工夫を凝らした、他所とは一味ちがう町づくりを急がなければならないということである。